小説

在日朝鮮人史

金達寿

下

小説在日朝鮮人史

下

金達寿

創樹社

小説・在日朝鮮人史（下）
（全二冊）　0093—0052—4249

1975年7月10日第1刷発行

著　者　金達寿
発行者　竹内　達
発行所　株式会社　創樹社
電話　東京 815・3331(代)　振替東京・154580
東京都文京区湯島2・2・1　〒113
印　刷　望月印刷所
製　本　美行製本
装　画　富山妙子
装　本　道吉　剛

1975 © Talsu Kim　乱丁・落丁はお取り替えします。

目

次

序章
八・一五以後 5
Ⅰ
番地のない部落 34
矢の津峠 71
旅で会った人 104
Ⅱ
孫令監 130
壺村吉童伝の試み 148
委員長と分会長 178

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Ⅲ
富士のみえる村で　216
Ⅳ
孤独な彼ら　258
夜きた男　280
日本にのこす登録証　303
あとがき　325
●「途中」の歴史、そして、小説＝小田　実　327

八・一五以後

人々は起ち上った。

長い年月を酬いられることなく、蔑まれ、虐められた底からえいえいと築いてきた生活はまるで夢のことのように投げ捨て、祖国へ、独立の朝鮮へと雪崩れを打った。人々は一夜のうちに数年、或いは数十年の生活を一本の麻縄や、風呂敷にくるんでただわれを先にと急いだ。日本の駅頭はこれらの群集、いまや希望にさざめき、叫喚する群衆で埋まり、下関、博多などの港は日夜をこれらの群衆によって占拠された。そこではすでにこの漂泊の生活に手馴れた人々によって焼野原に板や菰の囲いがされ、焼トタンの屋根が張られて応急の必要におうじた飲食店が軒を並べて現出した。そして喜びに気負い立った人々の濫費がそこに吸いとられていった。しかし、これを吸いとる側もまた気負い立っていた。そのような利益などは人々の眼中になかった。船が来るとこれらの人々もそのまま店を後から到着した人々に譲って、万歳の声に送られて玄海灘を渡っていった。

万歳、万歳！

朝鮮独立万歳！

連合軍の命令による日本政府の計画輸送はまだ実施されていなかった。八・一五以後、このときを待った歓声、叫喚のうちに逸早く日本全国にわたって組織を完了しつつあった朝連が強談判で日本政府から輸送列車を出させた。これまでに耕す土地を、或いは住む家を悪辣な手段によって次々と奪われ、日本に移住してきていた朝鮮人は三百万を数え、そこへまたあらたに繰り展げた蒙昧な戦争のために軍兵や徴用工として狩り出されてきていたものが百万を越えた。これらのものは降伏と同時に鉱山、軍隊、工場等から古草履の如く投げ出され、彼等は異郷で右往左往し、ただ下関へ、博多へと犇めき合ったが、朝連の連日の強談判でいやいや出される一本や二本の列車などで間に合う筈がなかった。そこへ連絡船はまだあるかないかの始末だったので下関や博多などの溜りは増える一方であり、なかには東京や大阪から三十トンや五十トンの小船を共同で購入し、子供や家財道具を積み込んで鳴門海峡の渦巻きを押し切り、玄海の荒波を乗越えてゆくものもあった。

おなじ同胞でありながら、人情というものであろうか、各県に本部をもってそこで選ばれた朝連の指導者たちは、こぞって自県下のものを一日も早く先に帰そうとし、これを庇い合って争って下関や博多へ乗込んでいった。東京に隣接するK県本部の李英用（リヨンヨン）もそのころ、その一人としてごった返す下関、博多に行ったことがある。それから一年経ったいま、再び彼は長崎行の列車にもたれて西へ、西へと運ばれながら、それが自分一身上にとっては不幸な結果を背負わされ、なおまた一つの不幸なことのために発たなければならなかった旅であったが、解放以来はじめてほっとした落着きをおぼえ、自分の上に起った不幸な映像とともにさる一年間の思い出が二重映しとなって、なつかしく微笑まし

いものとなって次から次へと展がって来るのであった。それは息つく間もない思い出であった。そしていまもなお息つく間もない日々である。これらの仕事――はじめて彼が生きていることの歓びや苦しみを見出すことが出来たこれらの仕事がなかったならば、彼は今度当面しただけの不幸だけで、はや参ってしまったであろう。彼は眠りはじめた隣のものが身体をもたせかけてきたのもそのままに、うっすらと眼をとじて自分の上に落ちてきた不幸の映像に追われながら、それを嚙みしめていたが、なおまた、その白い顔面には積極的な営みのための微笑が綻ぶのだった。

李英用はこの五日間のうちに二つの大きな悲しみと当惑に同時に直面した。その一つはあの空襲のさ中に結婚をして二年も経っていない妻の死である。妻は彼が帰還する同胞徴用工たちに解雇手当をとって持たせるために川崎の或る工場で、その社長と専務を相手に徹夜をした夜、子供を生み落して一人で蹠き苦しんだことと、彼は解放後は家や妻はほとんど顧みることがなかったので産後の栄養不良のためにそれから寝ついてしまい、この日はまた彼の属していたK県本部の第二回定期大会のために事務所で夜を明かした朝、妻は彼女の実家にそう遠くない場所にある自分の家へ帰らなければといいながら、彼の帰りはまだかといいつつ死んだ。英用が長距離電話でその報らせをうけて、顔も洗わずに駈けつけてみると、更にもう一つの不幸が彼をおどろかしたのである。それはたどたどしい諺文(オンムン)でつづられた母からの手紙であった。手紙は一ヵ月も前の日附で、佐世保のV二十四号という軍艦の中からであった。母はそこに何カ月か前から抑留されているのである。はじめて眼の前にした狡猾な軍需資本家や愚劣な戦いに破れて降伏しながらなおまだ朝鮮人や中国人を鼻の下に見下して安価な優越感を捨てようとはしない高級軍人等には、流暢な日本語を駆使して負けないつもりの英用であったが、さすがにあわてないではいられなかった。彼は解放後はじめて悲しみと困惑のために涙をなが

した。

帝国主義日本の降伏、カイロならびにポツダム宣言の受諾、かくて祖国朝鮮の独立！　雌伏三十六年の志士たちとともに人々は堰を切ったように起ち上った。人々は喚声とともに先を争って解放の祖国へ向った。しかし、解放の祖国は人々がその脳裡に描いた如く直ちに独立と繁栄とを担うのではなかった。それまでにはこれを占領したあらたな世界勢力の外交交渉のなかに立たされなければならず、また朝鮮人自身の現実的な主体的闘争が継続されなければならなかった。光栄は夢の如く訪れはしない！　やがて人々はこの現実のヴェールが徐々にはがされてくると、生活の基礎の固まらぬ、住宅払底のニュースが伝わる祖国への帰還に足踏みの状態を見せてきた。このころはすでに連合軍の措置で日本政府と朝連との間に計画輸送が行われていたが、ときに列車はほとんどガラ空きのままに走り出ていった。そしていずれの民族、いずれの国にもふるいに落される人々と落伍者はあるもので、帰還したこれらの人々は民族自らの闘争の間から漏れて更に一度帰っていった玄海灘を逆行しはじめた。呪われた過去において漂泊に馴らされた人々は、異郷ではあるが長年住み馴れたそこに手馴れた昨日までの生活があるというのであろう。人々は小さな漁船などを密船に仕立てて日本の沿岸や小島に着いた。そして人々は手に持った荷物ぐるみに再び、その手には打たれまいとして帰っていったにも拘らず日本の警察吏の手に捕えられて次から次と抑留され、押し返された。そのなかに英用の母も混っていたのである。

李英用も含めて朝連の指導者たちはこの点で明らかに誤りを犯したのだった。在住四百万を数えたこれらの人々は、この三月、遅くも五月までには朝連の機関をも含めて総ざらえに帰還してしまうも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のと考えていた。英用もまた多くの負い目を持つ自分ではあったが、開かれた未来を感じつつ八月のあの十六日には産月の近い妻と母を促して、帰還の仕度をはじめたのだった。

しかしまだ連合軍隊の上陸しない日本の各地は、いまにも何かが起らないではいない暑い重っ苦しい空気が低迷した。英用の住んでいる海軍基地では各所でむくむくとどす黒い煙が立ち上り、航空隊では飛行機が飛んで「皇軍に無条件降伏なし」とか「抗戦、玉砕」などというビラが撒き散らされたり、電車のなかなどでは日本刀を握った若い士官たちが仁王立ちとなって硬い文句で抗戦を叫んでいた。そして街は相変らず無気味にしんと静まったまま、首相の邸が焼き払われ、彼等が絶対神聖としていた天皇の宮城が襲われたことなどが伝わった。英用は一人でひそかに唇をうごかして苦笑した。そして彼は手にもった煙草を口にくわえたのであるが、と、彼はマッチを擦るのを忘れて瞳をひろげた。後になって彼は思い返すのであるが、このときが彼の生涯にとっての分岐点であったのだ。英用の脳裡には一つの不安な翳、一種身ぶるいするような恐怖の念がさっとよぎり、それが宿って彼を硬直させたのである。それは関東大震災のことであった。もちろん彼はその震災のときに行われた惨虐を直接に経験したわけではなかった。しかしそれは彼のうちに何時か記憶となって生きていて、その記憶が生々しく蘇ってきた。そこへ母と妻は、街の百貨店の前で兵士が一人海軍士官に日本刀で斬り殺されたが、それが朝鮮人であった、などという噂が飛んでいることを外から伝えてきた。

それは八月の十七日のことであったが、英用は、まず自分たち朝鮮人は一ところに固まり集まらなければならぬと思った。そのために自分たちは急速に組織されなければならなかった。そうしてどうなるのか？　一つに固まって殺されるのか。そう思うと李英用はむらむらと胸を突き上げてくる怒り、抵抗心にわれを忘れた。英用は外へ飛び出していった。友人や、部落の同胞たちをたずねるつもりで

ある。友人や同胞たちもまた彼と同じ歓喜と不安の混り合った現実にとらえられているのであった。そして積み重ねられて来た怒り、いままでは思いも及ばなかったそれへのはげしい抵抗が、そのためには爆発へ導かれるであろうことも彼等もまた同じであった。英用がそうして家を飛び出していったあと、入れ違いに尹隆生（ユンリュンション）が同じ目的をもって彼をたずねたことでもそれはよく分った。彼等は直ちにそのような非常事態、たとえば九・一の関東大震災のときのような事態を目標に、それへ対処するための組織に着手した。

だが事態は間が抜けたように平穏に打ちすぎ、間もなくこの海軍基地から連合軍は波を蹴立てて上陸した。しかし、英用たちが関東大震災の記憶によってつくった秘密組織は、何時の間にか解放民族の自治機関として変貌しつつ膨脹し、各地におけるこのような組織とともに全国のまっさきに結成大会を行って日本におけるはじめての『民族大会』を開いて最初に警察と衝突して問題を投じた。英用たちY市在住朝鮮人同志会もこれに合流して全国統一的な朝連を結成するや、次々と要求される新しい事態によって切実な仕事もますます膨脹してゆくのだった。それは主として同胞の雪崩れを打った帰還に伴う仕事で、英用たちは必然的に犠牲を求められ最後に帰還する組とならなければならなかった。先を争って帰るもののなかには、逆にこちらへ向って帰って来る日本人が住んでいた住宅の一軒もつかみ、早く祖国における生活のとりでをつくろうとするものもあったが、英用たちはそのようなことは望んではならなかった。また彼等は望みもしなかった。ただ祖国の朝鮮が解放されたというだけで彼等は胸ふくらみ、血が沸き立つのであった。

そこで英用は、東京にいた同じ故郷の洞（ドン）の知合いが帰るのと一緒に先に帰っているという母を帰したのだった。妻ももしそのとき産月を控えた身体でなかったならば一緒に帰していたところであった。

だが同胞の帰還する足は朝鮮の情勢とともに波がひくように鈍くなり、三月、五月をすぎて、計画輸送の日限が近づいてもまだ六十万以上の人々が居残った。そして残れば残ったで、またそれに伴う切実な要求が生れ、この事態に応じて朝連の運動と仕事はまた次から次へと展がり深まるのだった。まだ祖国に政府がなくて放置されるこれらの人々を彼等は放置してゆくわけにはゆかないのであった。新しい国の小さな民族たちには、新しい国の民族として教育もされなければならない。民族六十万人の数は決して少数ではないのである。ことにこの教育という仕事はまた至難のことであった。ほとんど白紙から出てゆくからばかりではない、現在までに彼等が受けて来た帝国主義日本の奴隷的教育の、それがすべてであった残滓を一掃しなければならない。そればかりではない、それがなおまた至難なことにはそれを教育すべきものそれ自体がまたその残滓を蔽い被っていることである。何時の間にか英用はこの学院の教師をも兼ねているのだった。

東海道線や京釜(キョンブ)線のように直線的感じのうすい、ひどく迂廻すると思われる九州の汽車が佐世保の駅に着いたのは午前三時をすこし前だった。遠くへ来たという距離感で、見知らぬという感じの強いまばらな人々に混って英用が切符をわたして出ると、そこに宋庸得(ソンヨンドク)が出て来て待っていた。

「とにかく宿屋へいこう。疲れただろう、大丈夫だ」

宋は英用の手を握り返していった。英用はその「大丈夫だ」という言葉を最大限に聞いた。そしてそれが一時的な気安めの調子ではないことをたしかめると、彼は吻っとしたものを感ずると同時に、宋に対する親しみの籠った感謝の念にかられた。

宋は英用が妻の葬式を済ます間、英用の母のために先に出発していてくれたのだった。宋庸得は十

月十日に横浜の刑務所から出獄すると、直ちに朝連の運動にそのまま従事することになり、ついに彼もその運動にとらえられて帰還することの出来なかった英用たち同志の一人だった。そして彼と英用とはとくに親しかった。彼とは母はまだ一面識もなかったが、彼が行っていてくれたことで英用は、母のことは彼にもたれかかることが出来て、母のためにはただそんなに焦らなくてもよかったのだった。

「ところで、電報の通り市役所から居住証明書をとって来たのだろうね」

宋は駅前の旅館の部屋に坐るとあらためて妻の悔みをのべてからいった。

「それはもらって来たが、――ねえ宋君、僕は汽車のなかでずっと考えて来たのだけれども、これを機会に僕は帰国しなければならないと思うんだ。母のためにそれが最上の方法だと思うんだ。僕の母のことはまだ君にあまり話していないけれども、僕は母をこうしておくことが出来ない。様子を見てすぐ引返して子供を連れて来ようと思う。だから君も余り無理な骨は折らないようにしてくれ」

「莫迦いうな」

宋は横を向くようにして英用の言葉をはねつけた。

「君はまだ日本で必要なのだということは君が一番よく知っている。それはまだ許されんよ」

「本国でむろんやるよ。こちらは僕一人ぐらい」

「よせよ！　君がやらないとはいいはしないのだ。それなら俺も帰らなければならん。いまそれは君、逃避だよ。俺一人ぐらいなどと君はなぜそんな平凡なことをいうのだ。何もわれわれは誰も好んでこの日本に残されて苦労しているのじゃないのだ。なるほどそれは本国へ帰ればはなばなしいこともあろうし、仕事の仕甲斐もあろうし、報いられもするだろうさ。しかし目の前の、目前のこれをどうす

るのだ」

英用は首を下げるようにして黙っていた。英用は宋庸得をえがたい友人として尊敬していた。

「俺も、――いやその話はもう止めにしよう。お前はお母さんに逢いたいのだろう、ははは、――俺が先にお逢いしたよ。御元気だった。いくら待っても来ないからもし怪我をでもしたのではないかと、そんな夢をみたので来たといっていられたよ。母と子というものは困ったものだ。それで、すぐに逆送される筈だったが、南のあのコレラの流行のために軍艦に収容されて隔離されていたのだ。今度あのコレラもおさまったので帰されることになって上陸して三、四日前から収容所にいる。だが九時になったら軍政部へいこう。軍政部で君の、いやわれわれの事情を話したらそれが本当だという証明がつけば釈放してやってもいいといってくれた。つまり居住証明書はそのためなのだ。なかなか君を帰国させるものじゃないぞ、ははは。――」

宋は激し易い性格の男らしく英用の弱気を叱りつけるようにいい出したが、その一面、たちまち笑い出してなごやかな雰囲気を周囲につくり出すのだった。宋はもうそこまで運動をしていてくれたのだった。英用は友情のためにいよいよ首が垂れ下る気持だった。

「それにしても多くのものが抑留されているというのに、僕の母だけを特別に出してもらうということは。……」

「うむ、分っている。分っているよ。幸い二、三日中に全部帰されることになっているのだ。それは分っている。それは感傷だよ、仕事のためなのだ、何も君だけが母親を釈放してもらっていい楽をしようというのではないのだ。まあすこし寝ることにしよう、九時になったら軍政部へいくんだ」

宋庸得は英用をさえぎってそういいながら立ち上って服を脱ぐと、英用の入る一方を残して布団の

なかに入った。

すぐ宋は健康な鼾を立てはじめた。英用は彼の横で疲れてはいるが眼が冴えて、収容所の寝床で或いは眼を醒ましているかも知れない母を考え浮かべていたが、次に遠くへ来たなあと思い、ふと死んだ妻のことが思い出されて来た。可哀想な女であった。妻は二十二であった。解放の日の抱擁。——英用はラジオを聞きおわると、妻がにわかにいままでになく美しく見えてきて彼は狂ったもののごとく妻を抱きしめた。そして死。——

時計が八時半をさすと、宋はいままで眼を醒ましていたもののようにむっくり上半身をおこして起き上った。二人はなぜか、黙し合ったまま、朝食をすまして出てゆこうとすると、そこへ朝連の支部の委員長と外交部長が訪ねて来た。

「宋氏、昨日宋氏がゆかれて要求しましたものが今朝収容所から届けられて来ましたので、それから待遇のこともよく分りましたからと、——どうもわしらがせねばならぬことを、恐縮でありました」

といって金という委員長は眼をしょぼつかせながら統計表のようなものを前に差出し、そばの英用をみて会釈をした。委員長はひどく年取っていた。この支部も委員長や幹部というものが、日本の町会長などを見習って名誉職のように考えているらしかった。黄一文という外交部長も英用と同じくまだ三十前で若くはあったが、濁った眼つきをしていた。

差出されたものは収容所における統計表であった。死者六名、逃亡二名などという数字が見えた。宋はここへ来ても休まる暇もなく、一活動をしたものらしかった。英用はその紙片から顔を上げてあらためて浅黒い宋の顔を見つめ、今更のように献身精力的な彼に頭が下るのだった。

「いや、そうですか、御苦労さまでした。待遇の方はもう、——昨日あれからよく調べてみたのです

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com